



三重大学

医学部

No.193 2024.10.1

News

目 次

トピックス

慢性疼痛ワークショップの開催	2
7月21日（日）医学部研究フェスティバルを開催しました	6
国際対がん連合（The Union for International Cancer Control：UICC）会長が 三重大大学院医学研究科長・附属病院長を表敬訪問	渡邊 昌俊… 7
教授着任にあたり、着任の会を開催しました ……… 公衆衛生・産業医学・実地疫学分野 公衆衛生・感染症危機管理学講座	8

学会だより

第59回中部日本小児科学会を主催して	平山 雅浩… 9
第145回日本薬理学会近畿部会 優秀発表賞を受賞して	八十島左京… 10
日本リウマチ学会中部支部学術集会第35回中部リウマチ学会を開催しました	中島亜矢子… 11
第305回東海外科学会若手奨励賞を受賞して	長谷川文哉… 12
日本化学療法学会学術奨励賞を受賞して	朝居 祐貴… 13
第72回東海ストーマ・排泄リハビリテーション研究会を主催して	大北 喜基… 14
第79回日本消化器外科学会総会優秀演題賞を受賞して	竹本 司… 15

学位記授与式	16
--------	----

トピックス

慢性疼痛ワークショップの開催

慢性疼痛WSをファシリテーターの立場から。

麻酔科 向 井 雄 高
(はり師、きゅう師)

私は附属病院麻酔科で鍼（はり）と灸（きゅう）の外来を14年続けています。当時は、鍼灸を知る人は院内にはほぼ皆無で、日々鍼灸を知ってもらうために奔走していました。時は過ぎ、現在では学生の間から医療に関わる多職種が理解し合える機会があるのかと、時代の流れを実感しています。

さて、ワークショップの内容に触れると、1日目は、ブロック注射、鍼や灸の体験、筋口コモチェック、アロマ、筋弛緩法と様々な体験型学習を中心に、2日目はチームとして親交を深めつつ、午後はストレッチの体験、3日目は実際の症例をモデルとした様々な課題に対し、チームとして取り組んでもらう、ロールプレイをしました。各々

が自らが目指す専門職になりきって意見を出し合い、課題に立ち向かう姿は、あたかも戦士や武道家、魔法使いが「ひのきのぼう」や「こんぼう」を持って経験値を積み重ねていくようでした。

WSでは、皆さんには「楽しみながら学んでもらいたい」ですし、WSの経験が今後の目標や夢に繋がるようになれば良いと思っています。

来夏、WSでお会いできるのを楽しみにしています。

WSを3日間終えた後は、次の町でどうのつるぎくらいは買えるかもしれませんね。

慢性疼痛WSをファシリテーターの立場から

麻酔科 准教授 松 崎 孝

昨年、今年と神経ブロックのブースを担当させていただきました。3日間のコースですが、1日のみの参加で、皆様には大変ご迷惑をかけております。自分の子供もちょうど同じ年の大学生なので、心から愛を持って接することができました。子供達には、いつもプレゼンが下手だとダメ出しをいただいておりますが、大丈夫か？不安でいっぱいでした。少しでも麻酔科の仕事の魅力を伝えることができ

れば、幸いだと思っております。このような貴重な機会を与えていただいた、先生方には感謝の思いでいっぱいです。学生と接して、素朴な疑問が聞けるのは本当にうれしく、自分の原点を思い出します。素晴らしいプログラムなので、来年はできる限り3日間参加できるように努力したいと考えております。

神経ブロックは、実際の臨床では本当に役に立ちます。難しい痛みの診断を助けたり、患者様の痛





三重大学・鈴鹿医療科学大学合同「慢性疼痛」ワークショップに参加して

【受講者】

●医学部看護学科2年 福 士 はづき

今回慢性疼痛ワークショップに参加させていただいて、多職種で連携することの大切さを改めて実感しました。このワークショップは1日目と2日目で痛みやチームについて、疼痛緩和の様々な方法、薬膳、社会資源などについて学び、それらをもとに3日目にチームで事例検討を行うという構成になっています。学生は医学科・看護学科・薬学科・理学療学科・心理学科など他にも様々でした。疼痛緩和の体験ブースでは神経ブロック・鍼・灸など、計6種類の体験をさせていただき、楽しみながら学ぶことができました。また事例検討の際にはそれぞれの学科が各分野の知識や考え方を存分に活かし、新しい視点に触れながら

活発な検討にすることができました。三重大学医学部では医学科・看護学科のみであるため、鈴鹿医療科学大学と合同のプログラムであるからこそその貴重な交流であったと感じています。今まで他の職種が医療のどの範囲を担っているのか考える機会が少なかったため、今回の交流でそれぞれの職種について知る機会を持つことができました。将来医療職を目指す身として、他職種について知り、連携について体験を通して学ぶことができたと同時に、自分たちが担うべき役割もより明確になったように感じ、これからの学習に活かしていこうと思いました。

●医学部看護学科2年 前 田 望 羽

今回、WSに参加して様々なプログラムや鈴鹿医療科学大学の学生との交流から慢性疼痛に関することや、他職種との関わりについて実際に学ぶことができました。3日間のWSでは、体験を通した講義やグループで事例検討をする時間があり

ました。体験を通して講義では、実際にストレッチを行ったり、鍼灸やアロマの体験をしたりしました。また、事例検討では鈴鹿医療科学大学の学生の皆さんと一緒に同じ事例を検討し、その患者に対して適切な援助・介入はどのようなものなの

かを議論しました。この3日間を通して、普段学ぶことのないような慢性疼痛とはどのようなものなのか、慢性疼痛について効果的なアプローチにはどのようなものがあるのか知ることができました。さらに、他職種を志している学生との事例検討から、同じ患者に対しても様々な視点からの意

見を知ることができ、様々な意見に触れることができました。このWSは、普段の大学の講義では経験することのないようなことを多く経験することができた機会になりました。このような貴重な体験に参加することができて良かったです。

【学生サポーター】

●医学部医学科4年 宇佐美 知 可

私はすずみえに所属している医学科4年生です。2年生の際には参加者としてワークショップに関わらせていただきました。ワークショップでは、普段関わることが少ない他学部の人と一緒に話しかうことができ、貴重な経験となりました。まだ2年生であっても、それぞれ自分の目指している職業に沿った考え方に寄っていることに気づかされ、自分とは違う職種を目指している方の視点を

知ることができて良かったです。サポーターとしては先生方のお手伝いをさせていただきながら、自分も実際に体験をすることができて、とても勉強になりました。このワークショップでは、いろんな分野の先生方からお話を聞くことに加え、実際に体験を通して学ぶことができる本当に貴重な機会だと思いますので、ぜひ興味がある方は参加してみてください。

●医学部医学科3年 加 藤 直 朗

私は3年生で、すずみえという団体に所属しています。すずみえはワークショップをサポートする側で携わることを目的とした団体です。昨年、慢性疼痛ワークショップに受講者として参加し、それがきっかけで所属しました。今年はサポーターとして参加させていただき、サポーター視点だからこその学びも得られました。学年が上がり臨床に近い講義が増えたことで、検査・治療法多

様さを理解し他の専門職の必要性を痛感する毎日です。ワークショップを通じて他の専門職との関わりを昨年より深く感じられます。また、先生方の講義の補助もするため、より気軽に先生からお話を聞くことができます。通常の授業とは全く異なった学習で新しい学びを得られるので、サポーター、受講者、どんな形であれ一度参加する事をおすすめします。

●医学部医学科3年 木 村 怜 慈

私は、去年は受講者として、一昨年と今年は学生サポーターという形で慢性疼痛ワークショップに関わらせていただいております。このワーク

ショップの特色として、鈴鹿医療科学大学さんとの合同授業である点が挙げられると思います。普段の大学の授業では同学科以外の人と関わること

はほとんどないですが、このワークショップでは、様々な医療系の職種を目指している学生と交流する機会があります。そういった学生との仲を深め、グループでの話し合いを進めていく中で、それぞれの職種についての理解が深まり、また、チーム医療において、自分が将来目指している職種はどういった役割を果たしているのかを知る良いきっかけになるとと思います。そして、このワークショップには多種多様な医療職を目指す学生が参

加しているだけでなく、様々な職種の先生方も数多く参加しています。そうした先生方のユニークな講義や体験ブースを受けることができ、その上、先生に気軽に質問もできるということもこのワークショップの素晴らしい点だと思います。慢性疼痛やチーム医療に興味がある方はもちろんですが、そうでない方も、ぜひ一度このワークショップに参加してみてください。

7月21日（日）医学部研究フェスティバルを開催しました



7月21日（日）医学部研究フェスティバルが開催されました。これは医学部における研究促進を目的として、突出した研究や異分野融合につながる発展性・将来性のある研究テーマについて募集するもので、第1回目の今回は43件の応募がありました。

当日は審査の結果、特に優秀だった研究合計10件が発表を行い、意見交換も活発に行われました。これら10件には、アワードとして研究費が配分されました。

○基礎講座部門

統合薬理学 西村 有平

「一次線毛による新たなシグナル制御機構の解明」

感染症制御医学・分子遺伝学 野阪 哲哉

「次世代型T細胞シグナル活性化抗腫瘍ウイルスTAVの開発」

分子生理学 坂東 泰子

「生理的エネルギー貯蔵庫から慢性炎症のCulpritへと変容する異所性脂肪代謝メカニズムの臓器横断的探索」

腫瘍病理学 渡邊 昌俊

「骨欠損病変に対する特異的形態を呈する表面修飾機能性マテリアルの開発

ー三重の知見で新規素材に命を吹き込めー」

○臨床講座部門

脳神経外科 辻 正範

「数値流体力学 (computational fluid dynamics) を用いた脳動脈疾患の病態解明」

胸部心臓血管外科学 鳥羽 修平

「優れた外科手技」の解明、およびその効果的な習得法の確立」

腎泌尿器外科学 杉野 友亮

「筋層浸潤性膀胱癌に対するシスプラチンの薬効評価を目的としたゼブラフィッシュ異種移植モデルの開発」

形成外科学 細見 謙登

「線維化の制御による組織再生の実現」

○看護講座部門

老年看護学 磯和 勅子

「過疎高齢化地域における災害時要配慮高齢者の防災・減災支援を目指した人材育成システムの構築」

がん看護学 角甲 純

「がん患者の呼吸困難マネジメントへの挑戦」



2024

Research Festival

医学部研究フェスティバル

医学部の未来を拓く10テーマの研究発表

7.21 (Sun)

Check! 参加費無料の交流会も同時開催!

場所	外来・診療棟5F 大ホール
時間	14:30～ 研究発表 17:15～ 交流会・表彰式 (18:30 終了予定)

- 医学部におけるこれまでの実績を踏まえ、突出した研究テーマや、異分野融合につながり発展可能性のある研究テーマを募集し、上位10テーマ(基礎4件、臨床4件、看護2件)の発表を行います。(発表者・発表テーマでは後日発表)
- 当日は、医学部執行部による審査のほか、来場いただいた方々の投票を踏まえ、順位を決定します。
- 交流会・表彰式では軽食をご用意しております。
- 職員の方、どなたでもご参加いただけます。

三重大大学
MIE UNIVERSITY

【お問い合わせ】
経営管理課 研究支援室
担当 宮古・喜多村・岡田
内線 5720・5743
kk-sien@med.mie-u.ac.jp

国際対がん連合 (The Union for International Cancer Control: UICC) 会長が 三重大大学院医学研究科長・附属病院長を表敬訪問

三重大大学医学部附属病院・副院長、総合がん治療センター・研究支援部門・部門長 渡 邊 昌 俊

2024年10月4日(金曜日)夕方、がんの制圧を目標とするUICCの会長であるJeff Dunn教授が田島和雄元愛知県がんセンター研究所所長・元三重大大学医学部附属病院顧問、河原ノリエUICC日本委員会広報委員会委員長らとともに平山雅浩三重大大学院医学研究科長及び池田智明附属病

院長を表敬訪問されました。Jeff会長はSouthern Queensland大学の教授で、オーストラリアの前立腺がん研究財団のトップも務めています。現在の関心事の一つは後発開発途上国のみならず日本を含めた先進国内でのがん医療の格差です。短時間ながら、日本のがん疫学・臨床などについて話



Jeff会長と平山研究科長、池田附属病院長らの記念撮影



田島先生自作のピザ窯で

しました。また、大学院委員長の俵功教授は
河原ノリエ広報委員会委員長とがん教育の情報交
換を行ないました。

翌日、Jeff会長は松阪にある古民家を改造した
田島邸でのピザパーティーを堪能した後、帰国さ
れました。

教授着任にあたり、着任の会を開催しました

公衆衛生・産業医学・実地疫学分野 公衆衛生・感染症危機管理学講座



令和6年2月1日に神谷元が三重大学大学院医
学系研究科 公衆衛生・産業医学・実地疫学分野
の教授に就任しました。そこで、三重県の皆様へ
のご挨拶のため、令和6年7月29日（月）に着任
の会を三重大学 三翠ホールにて開催いたしまし
た。着任の会では、神谷より三重県内の公衆衛生、
産業医学、医師会、小児科医会の先生方、三重県
庁、市町村、保健所をはじめとした自治体の関係
者の皆様へご挨拶をさせて頂き、今後の三重県で
の公衆衛生や予防医学における活動の目標を述べ
させて頂くとともに、一緒に頑張ってくれる当講

座のスタッフの紹介を行いました。その後、感染
症分野でご高名な青木眞先生（感染症コンサルタ
ント）より「日本の感染症の風景」と題し、これ
までの日本における感染症、並びに感染症対策の
変遷、さらに、今後の日本における感染症対策に
関するビジョンについてご講演を頂きました。青
木先生の素晴らしいご講演の後は、三翠ホールの
ホワイエにて、簡単な立食の情報交換会を行いま
した。当講座のスタッフから、ご来場くださった
先生方へご挨拶をさせて頂き、また、今後の三重
県の公衆衛生、産業医学、感染症対策などに関し



て、活発な意見交換が行われました。平日夕方の開催でしたが、76人の方にご出席頂き、多くの先生方から激励の言葉を頂き、思いを新たにしました。

た。今後、精力的に研究活動等を行い、三重県内のみならず、日本、世界へと貢献していく所存です。

学会だより

第59回中部日本小児科学会を主催して

三重大学大学院医学系研究科小児科学 平 山 雅 浩



令和6年8月18日（日）、第59回中部日本小児科学会をハイブリッド形式にて開催いたしました。三重大学が担当するのは10年ぶりのこととなります。本学会は日本小児科学会のブロック大会であり、東海北陸7県（愛知、岐阜、三重、長野、福井、石川、富山）の11大学とその関連施設、小児科医師会の小児科医が参加する学会です。昨年に引き続き、今年もハイブリッド形式で開催し、現地会場は三重県医師会館、主に2会場を使用し、現地参加に加え、WEB配信も行いました。

特別講演では富山大学医学部小児科教授の今井千速先生に「小児がんの免疫細胞療法の基礎と応用」についてご講演をいただきました。共催セミナーでは、感染症、アレルギー、神経、内分泌の4つの分野に関する教育的講演を行いました。また、一般演題として42演題が9つのセッションに分かれ、口頭発表が行なわれました。活発なディスカッションが展開され、学会全体で253名に参



加がありました。うち154名が現地参加、99名がオンライン参加でした。

さらに、本学会は前日に懇親野球大会を開催する貴重な伝統を持つ大会でもあります。2019年までは継続して行われていましたが、会員内の野球人口の減少、新型コロナウイルスの影響、働き方改革・男女共同参画の進展などにより中断していました。しかし今回は、4年ぶりに学会前日の8月17日（土）、懇親野球大会を復活させました。熱中症アラートが発出される中、体調管理に十分留



意しつつ、試合時間を短縮して実施しました。各大学の先生方はそれぞれ生き生きと楽しんでプレーされ、学術集会に華をそえるイベントとなりました。

今回の学会は、懇親野球大会の復活と10年ぶりの学術集会をハイブリッド形式で開催することで、中部地区の小児科医や研究者同士の交流の場として非常に有意義なものとなりました。

第145回日本薬理学会近畿部会 優秀発表賞を受賞して

統合薬理学 八十島 左 京

この度、2024年7月6日（土）に広島国際大学呉キャンパス（呉市）にて開催されました第145回日本薬理学会近畿部会において優秀発表賞をいただきましたので、謹んでご報告を申し上げます。演題名「Snijders Blok-Campeau症候群モデルゼブラフィッシュの表現型解析」

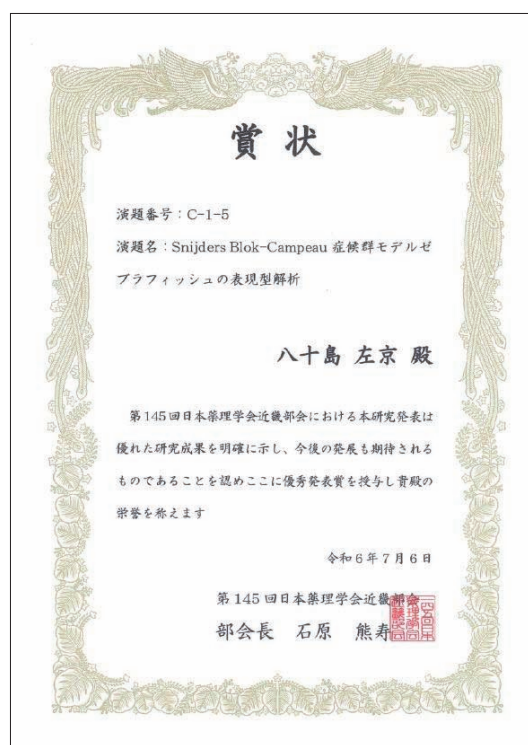
以下に研究内容について簡単にご紹介申し上げます。

本研究では、神奈川県立子ども医療センターのSnijders Blok-Campeau症候群（以下本症）患者5名の臨床情報をもとにモデルゼブラフィッシュを作成し、その行動解析を基盤とする網羅的な解析を行うことでその表現型を解析しました。行動解析の結果、過剰な社会性と低い攻撃性を有していることが見出されました。これは臨床表現型がモデルゼブラフィッシュにおいて再現されていることを示すものです。また、脳メタボローム解析の結果、ミトコンドリア機能異常が示唆され、治療薬としてメトホルミンを見出しました。これをゼブラフィッシュに投与して行動解析を行なった結果、その行動異常の一部が改善されました。これらの結果から、メトホルミンは本症の治療薬となりうる可能性が見出されました。現在、もう一方の行動異常に対してメトホルミンが治療効果を有するかの解析を鋭意進めています。本研究は私が2年次から取り組み、現在共同第2著者として論文をsubmitしたところです。いくつかの学会

発表を経てこのように研究結果を世界に発信できるまでに至り、また本学会では優秀発表賞を賜うことができ、達成感と共に身が引き締まる思いです。

私は本学医学部医学科4年生であり、1年次より西村有平教授が主宰される統合薬理学分野にて新医学専攻コースに在籍する学生として活動をさせていただいております。本受賞を励みに日々の研究活動や勉学により一層精進して参ります。

最後に、本研究にご協力いただきました患者様とそのご家族様に深い敬意と感謝を申し上げます



とともに、本受賞に際しご指導を賜りました西村有平教授、白水崇助教をはじめとする統合薬理学講座の方々、共同研究者の黒澤健司先生をはじめとする神奈川県立こども医療センターの方々、日

頃支えてくれている友人、先輩、後輩、家族にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

日本リウマチ学会中部支部学術集会

第35回中部リウマチ学会を開催しました

リウマチ膠原病内科学 教授 中 島 亜矢子



2024年9月6日から7日にかけて、日本リウマチ学会中部支部学術集会 第35回中部リウマチ学会を、三重県津市のホテルグリーンパーク津にて開催いたしました。三重県での開催は、2006年に当時の整形外科教授でいらした内田淳正先生が主催されて以来、実に18年ぶりとなりました。

2017年度に開設された三重大学リウマチ膠原病内科学および医学部附属病院リウマチ・膠原病センターのテーマは「力になる」です。このテーマには、リウマチ膠原病診療において、患者さんにも診療を行う医療者にも力になれる存在でありた



教室員とリウマチナース

いという思いが込められています。この理念をそのまま本学会のテーマといたしました。

開催直前には、史上最強と称された台風10号が猛威を振るっておりましたが、学会当日は天候にも恵まれ、参加目標の400名を大きく上回る500名以上の方々にご参加いただき、会場は活気に満ちていました。

特別企画2つ、シンポジウム3つ、「力になる」セミナー3つ、若手男女活躍セッション、一般演



開会式での学会長挨拶

題、そして企業共催講演17件と、限られた時間を最大限に活用し、タイトなスケジュールで進行しました。特に若手男女活躍セッションでは、一般演題に加え自己アピールの機会も設け、最優秀および優秀演題賞を設定したこともあってか、多数の応募があり、中部支部の将来が非常に有望であると感じました。

休憩室に用意した赤福は瞬く間になくなり、また教室員が選定してくれたランチョンセミナーの

うなぎ弁当や松阪牛ステーキ弁当も大好評でした。今回の学会を通じて、参加者の皆様には最新の情報を得て、新たな友と出会い、旧交を温め、美味し国・三重の味を堪能していただけたのではないかと感じています。

最後に、ご協力くださった先生方、メディカルスタッフの皆様、そして企業の皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



最優秀／優秀演題賞受賞者



懇親会も盛況でした

第305回東海外科学会若手奨励賞を受賞して

三重大学医学部附属病院 肝胆膵・移植外科 長谷川 文 哉



外科専攻医として当院肝胆膵・移植外科で研修中、2024年4月13日に名古屋国際会議場で開催されました第305回東海外科学会にて口頭発表の機会を頂き、若手奨励賞を受賞しましたので報告さ

せていただきます。

演題は「異なる治療を行った術後離断型胆汁漏の3例」です。離断型胆汁漏は胆管損傷に伴う胆汁漏の中でも下流の胆管との交通が離断されており腹腔内に胆汁が漏出し続けるものを指し、治療に難渋することの多い肝胆膵領域手術後合併症の一つです。今回、ロボット支援下幽門輪温存膵頭十二指腸切除術後、亜全胃温存膵頭十二指腸切除術後、腹腔鏡下胆嚢摘出術後の3症例に生じた離断型胆汁漏の治療について考察を加え報告しました。治療方法には胆管焼灼、胆管空腸吻合術、肝切除などが挙げられますが、各治療の侵襲度や胆管狭窄などの合併症リスク、また患者の肝予備能

や耐術能などを総合的に考慮した上での治療選択が重要であると考えました。

この発表を通じて、自分自身のみでは経験し得ない貴重な3症例に触れ勉強させていただくこと

ができた事を、水野修吾教授、伊藤貴洋先生、種村彰洋先生、栗山直久先生はじめご指導いただきました先生方に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

日本化学療法学会学術奨励賞を受賞して

附属病院薬剤部 講師 朝 居 祐 貴



この度、「日本化学療法学会学術奨励賞」を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。この賞は、日本化学療法学会の英文誌Journal of Infection and Chemotherapyに掲載された論文の中から選考され、2023年度の受賞者として1名が選出されます。今回の受賞論文であります「Impact of antimicrobial stewardship program-driven educational intervention for vancomycin loading dose on mortality」について紹介します。

抗菌薬の適正使用を支援するプログラム（以下、ASP）において、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌の治療薬であるバンコマイシンの適正使用への取り組みが求められています。バンコマイシンの有効性を担保し、腎機能障害を回避するためには、血中濃度－時間曲線下面積／最少発育阻止濃度を指標として、400－600に到達することが重要とされています。特に重症感染症においては、早期に目標血中濃度への到達が患者予後に影響するた

め、バンコマイシンの初回投与における負荷投与は必須ではありますが、実臨床にて十分量の負荷投与が実施されていない症例が散見されていました。そのため、私は前任地である国立病院機構三重中央医療センターでの抗菌薬適正使用支援チームの一員として、ASPに基づいたバンコマイシンの負荷投与推進に向けた医療スタッフへの教育的介入を行いました。

本ASPは、負荷投与実施率の現状調査を行い、その現状を院内の全職種に対して、バンコマイシンに関する教育講演を通じて周知し、再度、負荷投与の重要性について講習会を実施しました。さらに、バンコマイシンの初回投与までの院内における運用方法の変更を行いました。その結果、ASP前での負荷投与実施率は22.3%（27/122）であったのに対し、教育的介入によって63.6%（21/33）へ有意に増加しました（ $p = 0.007$ ）。28日死亡率は、ASP前の23.7%（9/38）と比較して、ASP後では6.1%（2/33）へ有意に減少しました（ $p = 0.041$ ）。

このような成果は、チーム医療の一員である薬剤師が、データ駆動型の教育的介入を病院全体で取り組んだ実績として評価をいただきました。日々奮闘しておりましたASPの取り組みが、このような栄えのある賞に選出され、とても光栄に思います。現在では、抗菌薬の適正使用および副作用のリスク軽減に向けた臨床研究、基礎研究を展

開しております。今後も、エビデンス構築に向けて日々研究を行っていき、医療の発展に貢献していきたいと考えております。

最後に、本研究を実施するにあたり多大なるご指導ご鞭撻を賜りました国立病院機構三重中央医療センター呼吸器内科 井端英憲先生、感染対策



室 近澤香織副看護師長、薬剤部 小西友美先生、山本高範先生、三重大学医学部附属病院薬剤部 岩本卓也教授に深くお詫び申し上げます。

(受賞論文)

Impact of antimicrobial stewardship program-driven educational intervention for vancomycin loading dose on mortality. J Infect Chemother. 2023 ; 29 (11) : 1023–1032.

(著 者)

Asai Y, Konishi T, Yamamoto T, Chikazawa K, Nakano M, Kinoshita E, Yamada K, Ibata H.

第72回東海ストーマ・排泄リハビリテーション研究会を主催して

三重大学大学院消化管・小児外科 准教授（研究会事務局長） 大 北 喜 基

2024年8月3日（土）、三重大学地域イノベーションホールにて、第72回東海ストーマ・排泄リハビリテーション研究会が三重大学医学部消化管・小児外科学講座主催（当番世話人間山裕二教授）で開催され、96名の医師、看護師の皆様にご参加いただきました。

本研究会は、1980年6月に愛知県がんセンター消化器外科部の山田栄吉先生（代表者）、中里博昭先生（世話人）が第1回研究会を開催したことに始まります。日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会に先駆ける事4年、日本で最初に発足したストーマに関する学術集会です。大腸癌罹患の増加に伴い、オストメイト（人工肛門・人工膀胱を造設した方）の患者さんは年々増えており、この研究会が果たす社会的使命は非常に大きいものです。

今回の研究会では「オストメイトを支える多職

種連携」を主題とし、一般演題を含む合計17演題の発表がありました。三重県内のみならず、静岡、愛知、岐阜からも参加および演題発表があり、ストーマケアの実践ならびに地域におけるオストメイトを支援する体制づくりについて活発な議論が行われました。特別講演では三重大学医学部腎泌尿器外科学講座の井上貴博教授より「失禁型尿路変向の温故知新」というタイトルでご講演いただ



きました。尿路再建の歴史からロボット支援下手術を含む最新の手術についてご講演いただき、尿路系ストーマに関する新たな知識をアップデートする大変貴重な機会となりました。

医師と看護師が共通のテーマで議論できた非常

に有意義な研究会となり、盛会裏に終了することができました。この場を借りて、研究会の準備、運営にご尽力いただいた三重大学消化管・小児外科医局員、同門会、三重大学看護部の皆様に深く感謝申し上げます。

第79回日本消化器外科学会総会優秀演題賞を受賞して

医学部医学科5年（肝胆膵・移植外科学 研究室研修生） 竹 本 司



2024年7月に開催された第79回消化器外科学会総会 学部学生・メディカルスタッフ・初期研修医セッションにおいて優秀演題賞を受賞することができましたのでご報告いたします。

受賞した演題は「レディオミクス解析を用いた膵頭十二指腸切除術後膵液瘻の術前予測モデルの構築」です。

レディオミクス解析とは、CTやMRIなどの医療画像上の関心領域（ROI；region of interest）において、人間の目では識別不可能な画像上の特徴を客観的かつ定量的な画像特徴量として抽出し、それらを網羅的に解析して臨床情報（腫瘍の遺伝子変異や予後など）との関係を明らかにする研究

分野です。

以下、研究内容に関してごく簡単に説明させていただきます。

膵頭十二指腸切除術(pancreaticoduodenectomy: PD)後の膵液瘻(postoperative pancreatic fistula: POPF)は腹腔内出血などの時に致死的な合併症をきたします。そのため、膵切除術前の慎重なリスク評価が求められますが、危険因子として報告されている性別や年齢、BMIなどは、POPFを予測するうえで十分であるとは言えません。また、soft pancreasが強力な危険因子として報告されてきましたが、術中に知り得るこの情報は術前のリスク評価に利用できません。そこで、本研究では、術前臨床特徴量に加え、術前CT画像上のROI（推定残膵領域）から算出した画像特徴量を用いて、POPFの術前予測モデルを構築することと、POPFの予測におけるレディオミクス解析の有用性を評価することを目指しました。

研究対象は当科で2012年1月から2022年9月までにPDを行った565例のうち、術前CT撮影を単一CT機種（SOMATOM）で撮影し、適切にROIを抽出することができた250例です。この250例をPOPF (ISGPF) 非発生+Grade A (non-severe POPF) とPOPF Grade B+C (severe POPF) の比率を調節しながらTraining CohortとTest Cohort（7：3）に分割し、それぞれのCohortでモデ

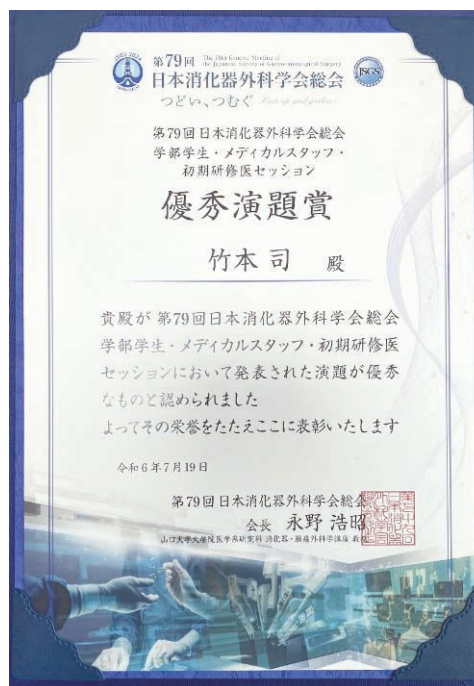
ルの学習と性能評価を行いました。

AUC scoreはロジスティック回帰モデルで Training Cohort 0.84 ± 0.06 、Test Cohort 0.80、XGBoostで Training Cohort 0.84 ± 0.08 、Test Cohort 0.82、Random Forestで Training Cohort 0.81 ± 0.06 、Test Cohort 0.82でした。またSHAP valueに基づいて各モデルに使用された特徴量の貢献度を評価したところ、いずれのモデルにおいても画像特徴量が上位を占めました。

以上の結果は、レディオミクス解析が、POPFの術前リスク評価と予防や早期治療介入に貢献する可能性を示唆しました。

最後になりますが、私がこのような荣誉ある賞を頂きましたのは、終始多大なご指導を賜った、肝胆膵・移植外科学の藤井武宏先生や、学生に学会発表という貴重な機会を与えてくださった同科教授の水野修吾先生、研究にあたり臨床データを提供頂いた同科の飯澤祐介先生のおかげです。こ

こに深謝の意を表します。また、本研究の遂行にあたり多大なご助言、ご協力を頂きました、同科の皆様に感謝申し上げます。



学位記授与式

令和6年7月19日（金）、医学部附属病院研究科長室において、学位記授与式が挙行政され、平山研究科長より7名の方々に三重大学博士（医学）の称号が授与されました。

令和6年9月25日（水）三翠ホール（小ホール）

において学位記授与式が挙行政され、伊藤学長より10名の方々に三重大学博士（医学）、2名の方々に三重大学修士（看護学）、1名の方々に三重大学博士（看護学）の称号が授与されました。



三重大学医学部の理念

Mission and Core Principles of Mie University Faculty of Medicine

確固たる使命感と倫理観をもつ医療人を育成し、豊かな創造力と研究能力を養い、人類の健康と福祉の向上につとめ、地域および国際社会に貢献する。

Mie University, School of Medicine aims to raise medical personnel with a steadfast sense of mission and ethical view, and to cultivate in it students and faculties both rich creativity and research capacity.

The school will strive for development of human health and welfare and contribute to regional and international society.

— 編集発行 —

三重大学 医学部ニュース編集委員会

〒514-8507 津市江戸橋2-174

国立大学法人 三重大学医学・病院管理部

TEL. 059 (232)1111(代表) FAX. 059(232)7498

E-mail : s-hisyokoho@mo.medic.mie-u.ac.jp
